

カリキュラム開発の歴史的変遷： 過去から未来の教育を展望する



本講では、学校における「カリキュラムづくり」の歴史的な流れを、世界と日本を舞台に概観し、未来の教育開発のための展望を得ることを目的とします。

名古屋大学名誉教授 安彦忠彦氏の講義録に基づく

物語の二つの軸：「系統主義」と「経験主義」の相克

学問の系統性を重んじる系統主義

「学問」「教科中心」「知識の伝達」

確立された知識や学問分野を、論理的な順序で効率的に伝達することを旨とする。

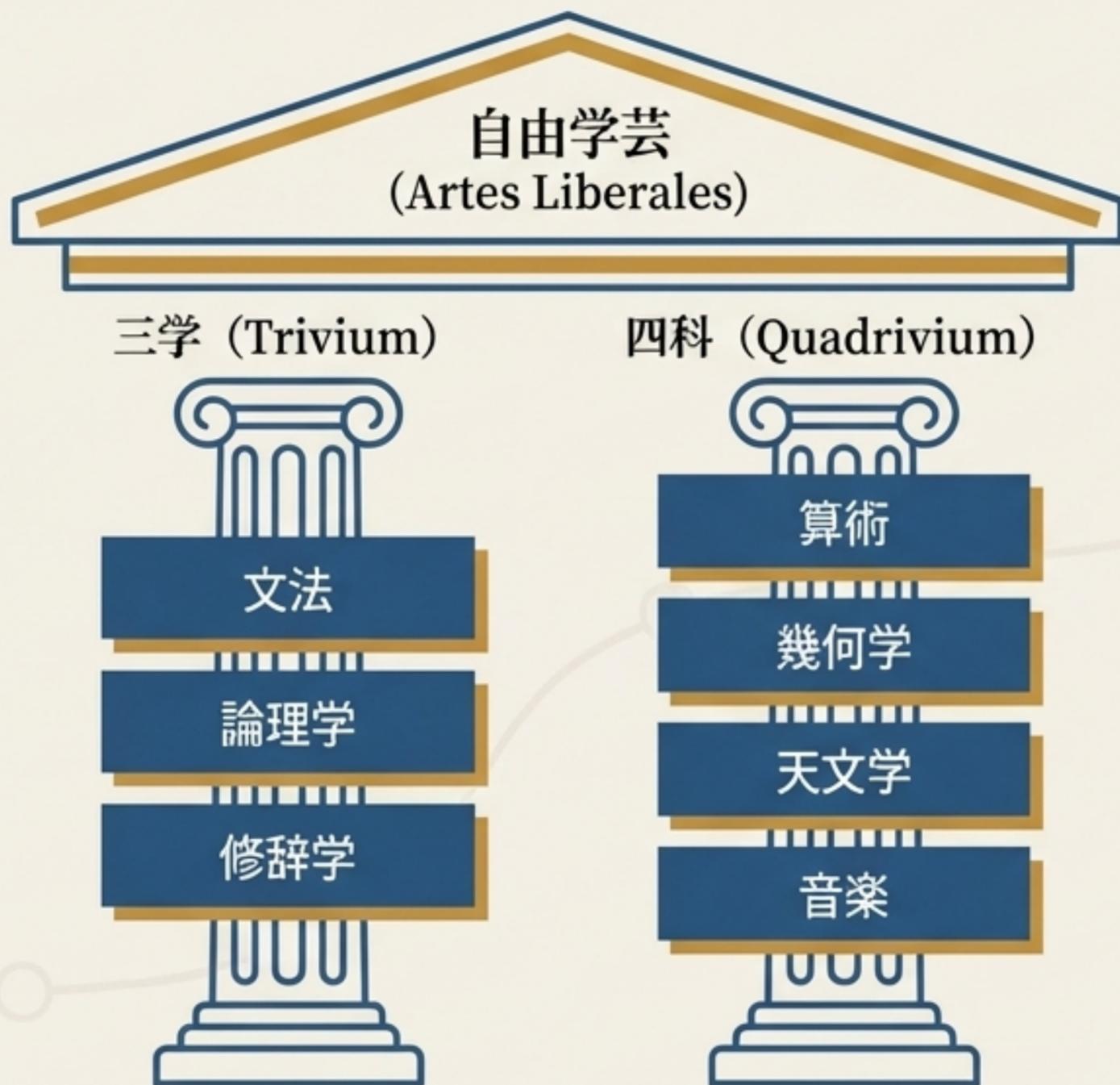
子供の経験を尊重する経験主義

「子供」「経験中心」「自発的学習」

子供の興味や関心、自発的な活動から学びを構成し、経験の拡大を目指す。

この二つの思想の間の「振り子」の動きが、カリキュラムの歴史を動かしてきた。

カリキュラムの源流：古代ギリシャ・ローマに始まる「自由七科」



• 古代ギリシャ (アテナイ)

- 自由市民に必要な教養として、初等では「読み・書き・体育・音楽」、中等で「自由七科」を教授。ただし公的制度ではなく、奴隷教師による個人教授が主。

• 古代ローマ

- ギリシャの自由七科を「自由学芸」として継承。知性や教養よりも国家への忠誠心が重視された。

• 中世ヨーロッパ

- キリスト教神学を最高点とし、その基礎教養として「自由学芸」が採用され、大学教育の土台となる。



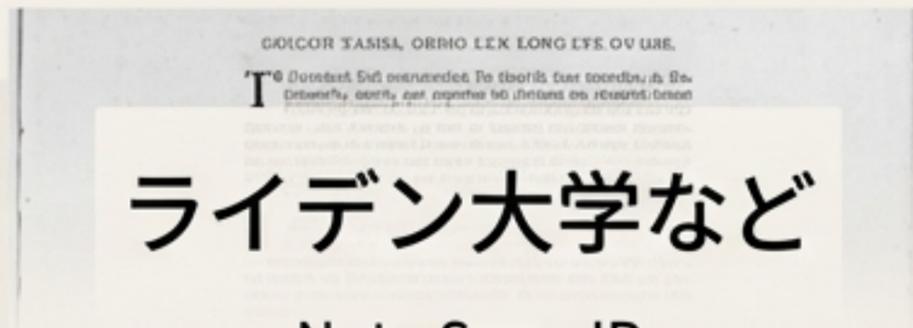
「カリキュラム」の誕生：宗教改革期、学ぶ道筋の「方法化」



中世の大学

Noto Sans JP
学者の自由裁量

16世紀 宗教改革



ライデン大学など

Noto Sans JP
学生の学ぶ道筋を
「方法的に一般化・明確化」

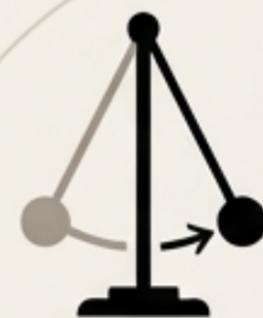
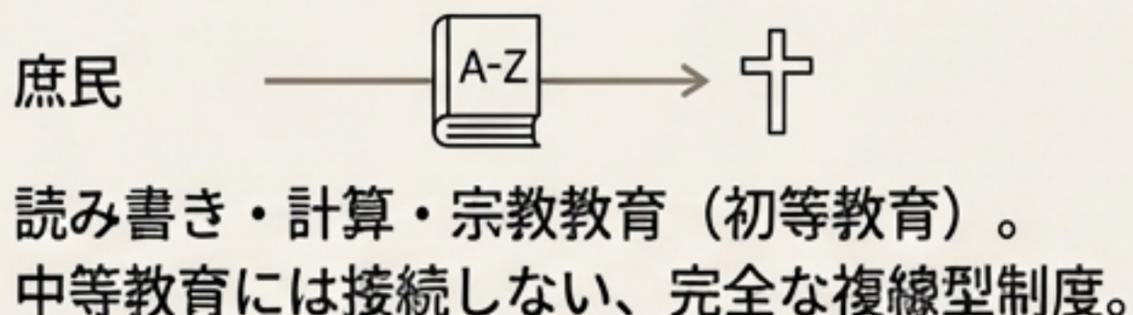
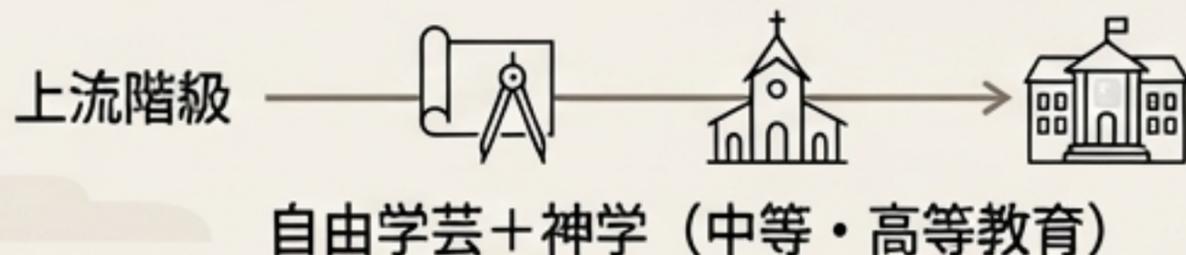
用語の起源

currere → カリキュラム

Noto Sans JP
ラテン語の「クレレ currere（走る・流れる）」が語源。

学ぶ手順を「コース（課程）」として明示。
英語の 'a course of study' の所以。

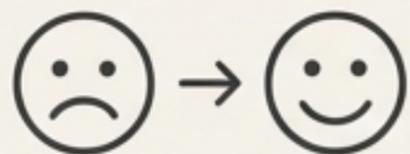
教育制度の複線化



系統主義

啓蒙の時代とルソーの革命：「子供の発見」が教育観を覆す

人間観の転換：「生来悪」から「生来善」へ。

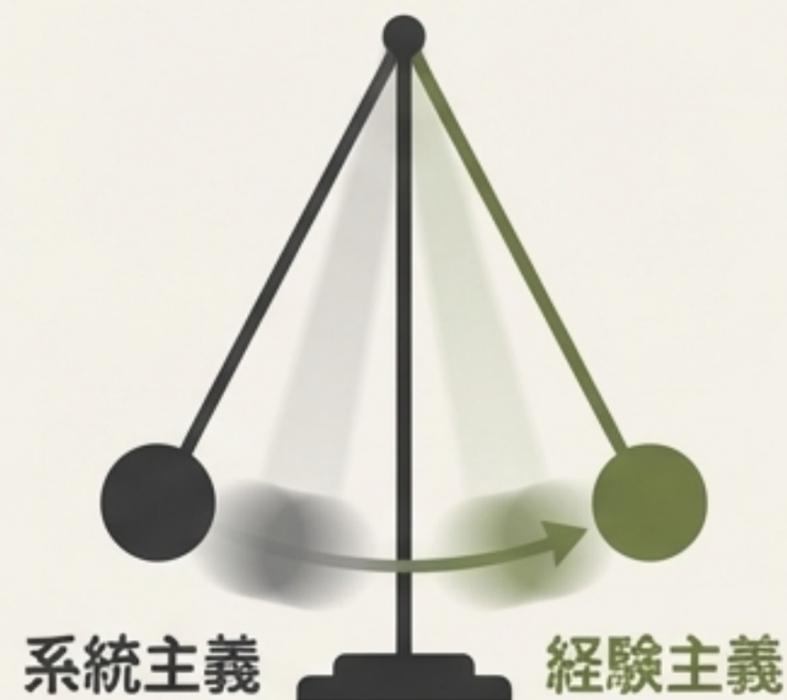


「人間は生まれたときは善なる存在だが、その後の社会によって悪くされるのだ」

デューイへの影響：この「子供中心」の思想は、20世紀のデューイによる「経験学習」の提唱へと繋がり、現代に至るまで重要視されている。

ルソーの消彼の思想：
「自然に帰れ！」

主張：「大人は子供に干渉せず、自然に育つに任せよ。」



近代以前の日本：階級ごとに分かれた儒学中心の教育



武士階級 (Samurai Class)

機関

藩校・藩学 (Hanko/Hangaku)

内容

儒学の「四書五経」中心。

レベル

中等・高等教育
(Secondary/Higher Education)



郷士・庶民 (Gōshi/Commoners)

機関

郷校・郷学 (Gōkō/Gōgaku)

内容

読み書き・計算、儒学。

レベル

初等・中等教育
(Primary/Secondary Education)



庶民 (Commoners)

機関

寺子屋 (Terakoya)

内容

読み書き・算盤、実用的な知識「往来物」。

影響

世界トップレベルの識字率を達成し、明治期の小学校の前身となる。



「富国強兵」を目指した明治：国家主導の系統的カリキュラムが始まる

1880（明治13）「改正教育令」

明治天皇の「教学聖旨」を受け、儒教的精神を強調。
必修教科：修身を筆頭に、読書、作文、習字、算術、日本歴史などが定められる。国家主義的な性格が強まる。

1872（明治5）「学制」

近代学校制度の確立。小学校から大学までの一貫した公教育制度を創設。
当初の教科：綴字、習字、読本、修身、算術、地学、窮理学など欧米風の系統学習。

1900（明治33）「学校令改正」

必修教科が「修身・国語・算術・体操」の4つに絞られ、その名称と順番がほぼ確定。

～1945「国民学校令」

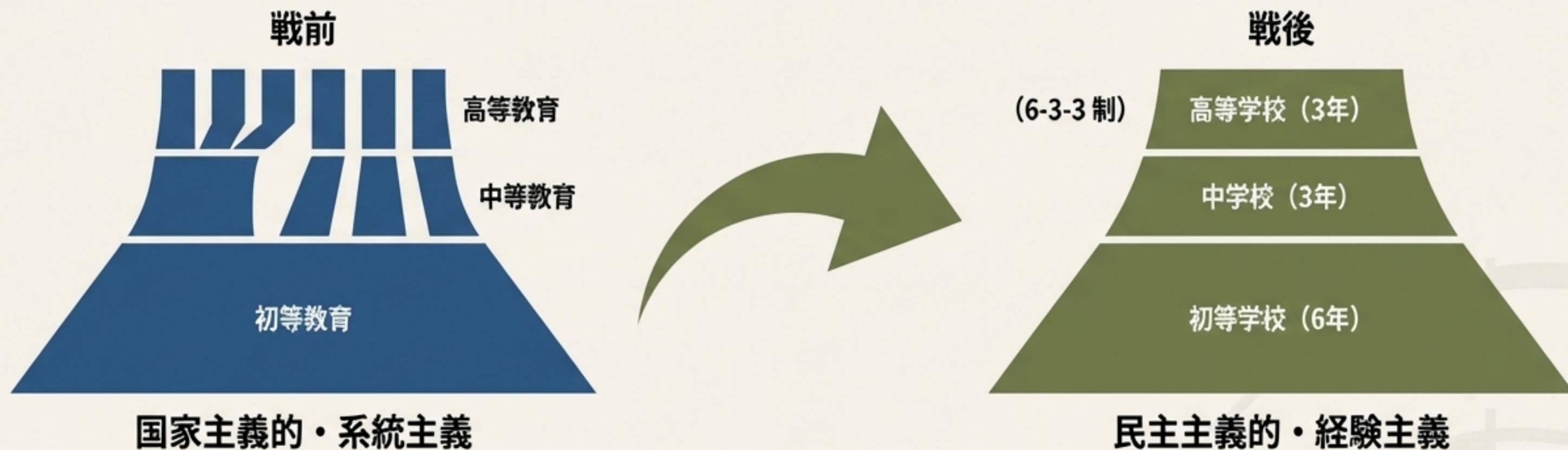
第二次大戦下、国家主義が極致に達する。
国民科（修身・国語）、理数科、体錬科など大教科制へ。

国家主義

系統主義

経験主義

戦後の大転換：デューイ思想の導入と「経験主義」への揺り戻し



法的基盤

新憲法と教育基本法

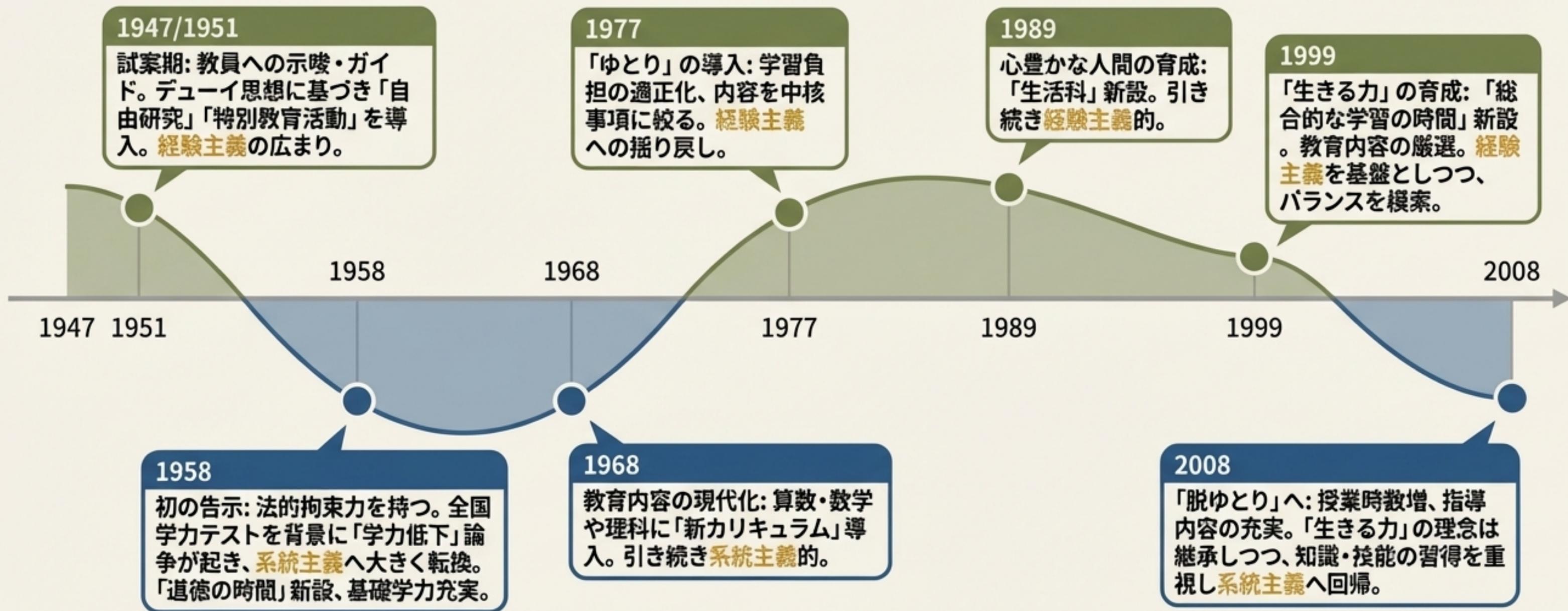
学校体系

複線型から単線型へ。全国民に教育の機会均等を保障。

カリキュラムの革新

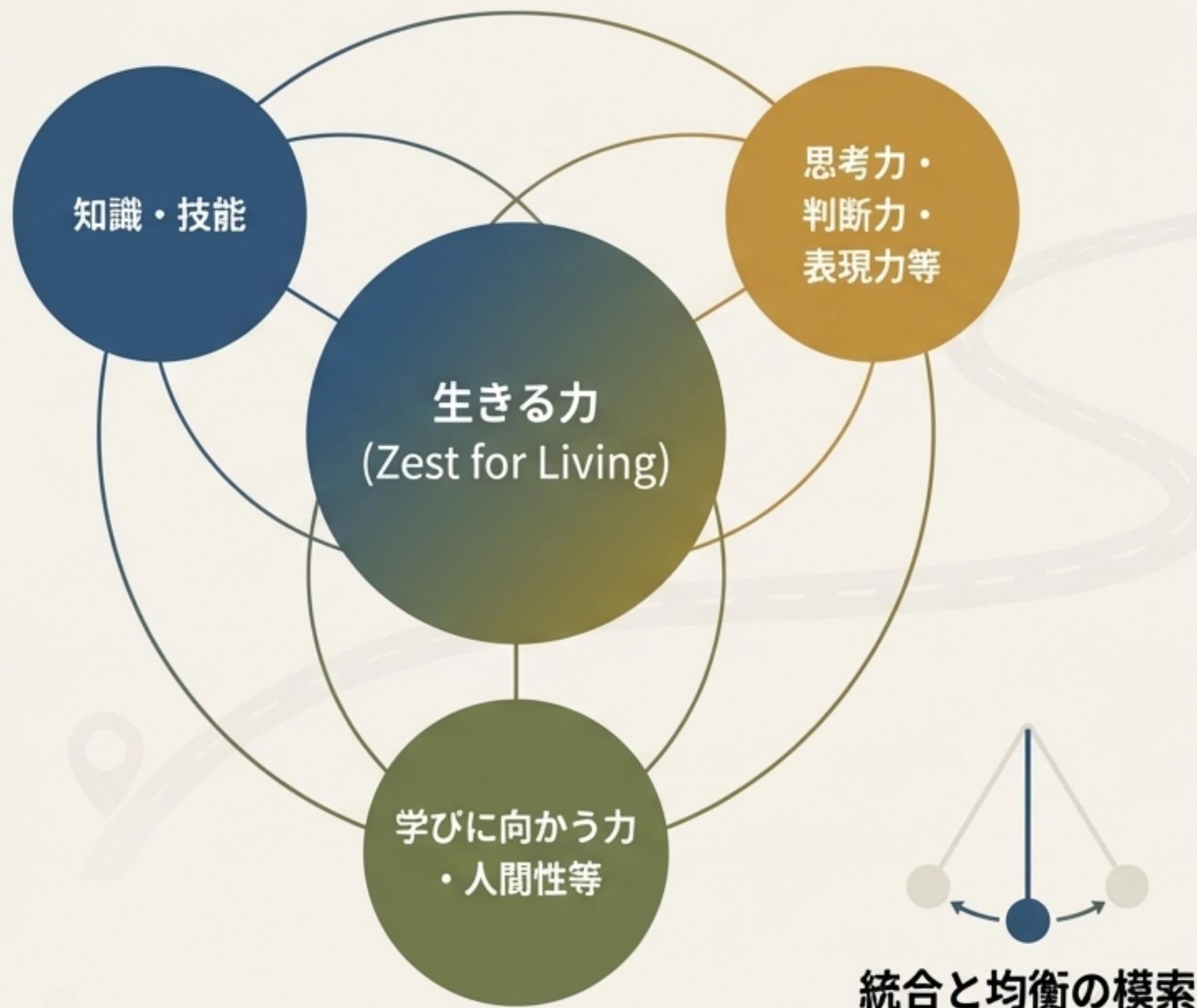
「教科」のみの構成から、「教科」と「教科外活動」から成るものへ。デューイの経験主義教育理論に影響され、「子供の学習経験の総体」というカリキュラム観が広まる。

「学習指導要領」の変遷にみる振り子の軌跡



カリキュラムは「経験主義」と「系統主義」の間を約10年周期で揺れ動いてきた。

現行学習指導要領（2017年改訂）：「主体的・対話的で深い学び」による統合の試み



目標

「**生きる力**」の理念を継承。

方法

「**主体的・対話的で深い学び**」
(Active, Interactive, and Deep Learning) の実現を目指す。

フレームワーク

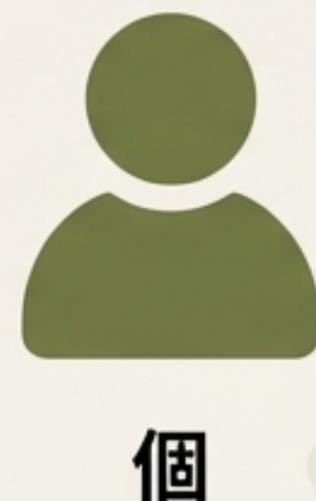
カリキュラム・マネジメント
(Curriculum Management) を重視。

新たな重点

情報教育や外国語教育を強化し、
「**社会に開かれた教育課程**」づくりを企図。

統合と均衡の模索

次期改訂への潮流（2030年代に向けて）：重点は「社会」から「子供個々人」へ



「子供の個別最適で協働的な学び」

- 継続：現行の「主体的・対話的で深い学び」の努力を継続。
- 新たな視点：
 - 社会の「高度情報化への対応」。
 - 個々の子供の個性・特性を生かす「カリキュラムの多様化・柔軟化」。
- 具体的提案：「技術・家庭科」を「情報・技術科」と「家庭科」に改編し、AIやICTの活用能力育成を強化。

未来のカリキュラムが応えるべき3つの根源的課題



地球環境問題

SDGsを含め、宇宙船地球号の持続可能な状態の保持に人間が責任を持つための教育。



核(戦争)問題

平和を希求し、核汚染・核戦争を起こさない世界を確立することを目指す教育。



高度情報化社会における人間倫理

速さ・効率性・便利さを超え、「自己(能力)制御型」の人間性を育む教育。万物の「所与性」を前提とした謙虚な人間性の自覚を促す。

カリキュラム開発は、知識伝達の技術論から、人類の未来を左右する倫理的実践へとその意味を深めている。